

すべての民間教育機関でも N I E 活動を

—学習塾「開倫塾」での活動をふまえて—

開倫塾

塾長 林 明夫

NIE 活動は、学校教育だけでなく民間の教育機関や社会教育、家庭教育においても必要な学習活動と考えている。ここでは、「開倫塾」での NIE 活動を Q and A の形式で紹介することにする。

Q : はじめに、「開倫塾」の創業に至った経緯とその理念、概要などについて教えてください。

A : (林 明夫。以下略) 1979 年に栃木県足利市で創業した学習塾です。創業者は私林明夫で、以来塾長を務めています。

私が学習塾を創業した理由が、NIE 活動に多少関連しますので、そこからお話しさせていただきます。

私は、慶應義塾大学法学部法律学科で法律学を学んでいたときに、刑事政策の宮沢浩一教授の研究會に所属していました。刑務所や少年院などの矯正施設を何か所か視察する中で、そのの所長や刑務官から、「学校などでちゃんと勉強していれば、このようなところに来なくても済んだのに」と基礎教育の大切さを教わりました。大学卒業後予備校や学習塾の講師、家庭教師をしながら、慶應義塾大学司法研究室の研究生として司法試験の勉強をしておりました。司法試験へのチャレンジを断念して何か仕事をと考えた際に、大学時代に視察した折の刑務所長や刑務官のことばを思い出し、一生の仕事として始めたのが学習塾です。

このような経緯で始めた学習塾であるため、「基礎教育」はもちろんのこと、「自律」や「自助」、「自己学習能力の育成」が最大のテーマとなっています。

開倫塾は現在、栃木県を中心に、群馬県と茨城県を合わせて 40 の校舎を持ち、2006 年 1 月末で 5746 名の塾生が学ぶ学習塾となっております。対象は小学生、中学生、高校生で、中学生が半数以上を占めています。詳細は、開倫塾のホームページ <http://www.kairin.co.jp/> で御覧ください。

Q : なぜ、学習塾である開倫塾が N I E 活動をしているのですか。

A : 私は新聞が大好きで、小学生の頃から毎日読んでいました。同時に、小学校や中学校時代には学級新聞や学校新聞づくりに、高校時代には生徒会新聞づくりに励み、とても勉強になった体験があります。この私自身の体験から、開倫塾で学ぶ塾生(開倫塾では、開倫塾で学ぶ児童・生徒を「塾生」と呼びます)にも、新聞を毎日一定時間以上読んだり、学級新聞・学校新聞・生徒会新聞づくりなどに参加したりして、勉強を深めていってもらいたいと希望しています。

そして、「新聞を読んで考える」ことは、塾生の勉強への「自覚」を高めるためにもとても役に立つと考えます。

Q : 「新聞を読み考える」ことは、「本人の自覚」を高めることとどのように関連するとお考えですか。

A : 「教育成果」を決定する要因は、「本人の自覚」と「先生の力量」であると考えます。これは、学校教育だけでなく、すべての民間教育機関での教育にも当てはまるものと考えます。

学習塾の教育は、「学校成績の向上」つまり「補習」と、「希望校合格」つまり「受験」が主な内容となります。しかし、どんなにカリキュラムや研修体制を整えて「先生の力量」向上を図っても、「本人の自覚」が不足する場合は「教育成果」を期待することができません。また、本人に向かって「自覚」するようにいくら言っても、反発されたり無視されたりでは「教育成果」に結びつくことはありません。

そこで、開倫塾では、教え手である先生としてやるべきことの1つに「本人の自覚」を「促す」ことがあると考え、「先生の力量」の中に「本人の自覚を促す」ことも入れて、どうしたら「塾生の自覚を促す」ことができるのかを考え続けて参りました。

Q：「本人の自覚」を促すためには、どうしたらよいとお考えですか。

A：授業ごとに行われる「確認テスト」や一定の学習範囲ごとの「単元テスト」、学期に1～2度の「定期テスト」、テスト範囲の広い「実力テスト」、「入学テスト」、実用英語検定などの「資格試験」などで、つまり試験でよい点を取ることや試験に合格することは「本人の自覚」を促す上で有用ですので、配慮が必要です。

ただし、試験でよい点数を取る、希望校に合格する、資格を取るなどのためだけに勉強に取り組む場合は、勉強すること自体がストレスをつくり出す直接の原因になったり、よい点数を取りさえすればよい、合格しさえすればよい、資格を取りさえすればよいとだけ考えるようになりがちです。

小学校の高学年から、中学生、高校生と学年が進むに従い、「自分とは何なのか」と考える中で、「何のために勉強するのか」「何のために生きるのか」「何のために働くのか」などについて考えるようになります。その際、幅広い読書、スポーツ、友人との議論、小さな旅行、ボランティア活動や地域活動などの社会体験、学校の先生以外の方々から話をお聞きしたことなどを、文章にまとめ繰り返し推敲し続けることも、「本人の自覚」を促すために役に立ちます。

これに加えて、「新聞を読んで考える」習慣を身につけることも、「本人の自覚」を促す上で重要と考えます。

Q：「本人の自覚」と「新聞を読んで考える」こととの関連を、開倫塾ではどのように考えていますか。

A：2006年1月1日発行の「開倫塾ニュース」の巻頭言で、私は次のように述べました。

『一所懸命やればものごとは成し遂げられる、例えば成績も上がり、勉強もできるようになります。ただし、一所懸命にやることはもちろん大切ですが、これに加えて、何のためにものごとに取り組むのか、例えば勉強であれば何のために勉強するのか、仕事であれば何のために仕事をするのかを考え、本人が「自覚」を持つことも極めて大切であると考えます。「自覚」が大きければ大きいほど、深ければ深いほど、一所懸命やることにターボエンジンが付いたと同様になりますので、成果も出るようになります。』

「本人の自覚」とは何か。何のために今取り組んでいることを行うのか、その意味を知ることであると思います。例えば、何のために今勉強しているのか、何のために働くのかなど、今していることやこれからすることの意味を自分でよく考えて明確にし、自分に言い聞かせ続け、自分のものにする、これが「自覚」であると私は考えます。

では、「自覚」を持つものごとをする、例えば勉強したり仕事をするにはどうしたらよいか。その一つの方法として、毎日のように1時間くらい時間をかけてじっくりと新聞を読み続けること

をお勧めします。1日1時間くらいの時間をかけて腰を落ち着けてじっくり新聞を読み続けると、世の中はどのように動いているのか、今世の中では何が問題になっているのか、これから人類はどのようなことに取り組まなければならないのかが、少しずつわかってきます。

勉強や仕事をするときには、世の中のことをよく知った上で「自覚」を持って行えば、行っていることの意味が自分なりにわかりますので、そこに自分というものが入ります。勉強や仕事は辛いかもしれませんが、それが自分以外の、つまり他人や世の中のためになり、また自分を生かすことになることを知ることにもなります。

長い引用で恐縮ですが、開倫塾ではこのような形で年に何回か、新聞を読んで考えることにより「本人の自覚」を促すよう努めております。

Q：新聞を読んで考えることは、「学校での成績向上」や「希望校合格」に役立つとお考えですか。

A：毎週1回、土曜日の9:15～9:25に放送し今春18年目に入ったCRT栃木放送「開倫塾の時間」の2003年1月11日分で、私は次のように説明しています。

『新聞を読むことにより、毎日大量の文章を深く考えながら読む習慣が身につきますので、学校での勉強に大いに役立ちます。

その理由は次の通りです。教科書や参考書は文字で書かれています。新聞を毎日読むことにより養われた大量の文字を読む力をもってすれば、ある程度念入りに読んだり調べたりするだけで、教科書や参考書に書いてあることが「理解」できる、つまり「うん、なるほど」とわかる場合がぐんと増えるということです。

学校の授業の「予習」をすることも苦ではなくなります。前もって次の授業の内容を読んだり調べたりして、よくわからないところをはっきりさせておくのが予習です。新聞を毎日1時間深く読むことによって、その予習をする力を身につけることができます。

また、新聞を毎日1時間読み続けると、世の中のことがいろいろわかってきて問題意識が高まりますので、何のために勉強するのかも少しずつわかってきます。各科目を勉強する意味もわかってきますので、勉強することが面白くなります。先生にも質問したくなりますし、友達と議論する場合も、なぜ自分はこう考えるのかその理由を述べるできるようになります。また、先生や友達がなぜそのように考えるのか、その理由も分かってきます。世の中にはたくさんの人がいる、自分もその一人で、生きていることは面白いなと感じることが増えます。

どの新聞にも投書欄があります。同年代の同性の人だけでなく、同世代の異性の人の投書を読むと、男女によって感じ方が異なることがわかります。また、年齢によっても、職業やおかれている境遇によっても、感じ方や考え方が随分と違うのだということもわかります。

1面の一番下の方にあるコラムや2～3面にある社説を毎日丹念に読むと、世界や日本で起きていることについての、その新聞社としての考え方を知ることができます。

家庭についてのページや、健康のページ、教育のページ、人生案内、人生相談などは読めば必ず役に立ちますし、政治のページや経済のページ、国際関連のページは、世の中の動きを知る上で興味が尽きません。社会面を見ると、人間としてやってよいことと悪いことを知ることができます。どうしたら事件や事故を未然に防げるかを考えるよいきっかけになります。』

学校の定期テストはもちろんのこと、高校入試や大学入試では、すべての科目において、短時間で大量の試験問題の文章を読み、その内容を十分理解した上で正答を導かなければ得点できない場合が多いようです。ですから、新聞を読んで考えることは高校入試や大学入試にも大いに役に立つ

と考えます。

近年は、高等教育機関において論文や面接が入学試験に課され、地域社会や日本、アジアや世界が抱える現代的な重要課題を問われる場合も多いようです。学校の教科書や受験用の参考書の知識だけでは問題文自体を理解することが難しく、まして理由まで付して自論を展開するには新聞を丹念に読む以外にはないと思われる出題が数多く見受けられます。

論文式の試験や面接試験では、新聞を読んで考えることが大いに役立つと考えます。

これに加えて、民間・公務員を問わず就職試験でも、新聞を読んで考える習慣の身についている受験生は、そうでない人に比べて、論文試験や面接試験で合格しやすいと言えます。

Q：それは、どういうことですか。

A：企業は、今も昔も、これからも、少し先の時代を読み、その時代に合った製品やサービスを時代に合った方法で提供し続けられない限り、原則倒産です。昨日のように今日があり、今日のように明日があればよいと考え、イノベーション(改革)やリノベーション(再建)の努力をし続けられないところは滅び去らざるを得ないと言えます。

国家公務員や地方公務員をはじめとする公共部門の仕事も同様で、今までの歴史を踏まえつつ、絶えず現代的な諸課題と近未来の課題を意識しながら政策を決定し、公共サービスを提供し続けなければなりません。したがって、公務員として採用されるからには、新聞を毎日読み込んだ上で使命に基づき業務を遂行できる能力を示さなければなりませんので、新聞を最大活用することは不可欠と言えます。

Q：それでは、開倫塾の「新聞を読んで考える」の具体的な取り組みをお話し下さい。

A：学習塾とはいえ 40 に上る校舎があり、5746 名にもなる塾生がいる民間の教育機関ですから、NIE 活動についての統一したカリキュラムや統一した教授法を開発し、それに基づいて「教育成果」を出すことがあるべき姿だと思いますが、まだまだ理想にはほど遠いのが現状です。

開倫塾の教育の担い手は、開倫塾の先生方と事務職員、保護者、ビジネスパートナー、地域社会の皆様と考え、余り無理のない範囲で、毎年少しずつ改善を重ねながら活動を推し進め、2010 年頃までには一応の成果が検証できるまでにしたいと考えております。

まずは、私を含めた開倫塾の先生方自身が新聞や NIE 活動について勉強することが第一と考え、新聞記者や地域の NIE 担当者をお招きして研修会を開催しております。

Q：先生方に対する新聞やNIE活動についての研修は、どのように行っているのですか。

A：読売新聞社の栃木印刷所を見学に行き、新聞が印刷されるまでの工程を見せて頂いた後、宇都宮支局長に、「新聞のできるまで」と題した講演をお願いし、それを参加者全員で聴講しました。聴講後、開倫塾の先生として、自分の担当する校舎やクラスでこれから先どのように「新聞を読んで考える」取り組みをするのかをレポート形式で提出してもらい、それらをまとめたものを参加者全員にフィードバックし、先生同士がお互い励まし合うきっかけづくりをしました。

昨年は、NIE 週間中に全校舎研修会が行われたため、栃木県での NIE 活動推進の事務局を担当する下野新聞社から講師を招き、その意義や課題について講演をして頂きました。聴講後は、参加者全員に開倫塾の今後の取り組みについてのレポートを執筆してもらい、それらを入力後にフィードバックしてお互い参考にしました。

更に、年に1回、NIE活動について開倫塾の全校舎の中でベストプラクティスと思われる数校舎を講師研修会の中で紹介し、情報の共有化を図り参考にしております。

— 新聞記事を活用した授業の実践例 —

新聞は、どの科目においても活用できる素晴らしい教材であると思います。私の校舎でも、新聞をただニュースを知るための道具ではなく、授業で積極的に活用しています。新聞記事の興味がわくところだけでも読んでいくと、文章の組み立て方、漢字力などが自然と身に付きます。中3生が作文を書くときも、社説の文章などを文の書き方のよい例として配付し、作文力のアップを図っています。社会科では、日頃のニュースを知ることが入試などの得点源になります。そこで、公民分野では国会の様子や日銀の政策などを、歴史分野では歴史的な発見などを、地理分野では世界の情勢などを扱った記事を授業に取り入れています。英語力アップには、本来は英字新聞を読むことが一番ですが、現実的に中学生には難しいので、興味がありそうな新聞記事を活用して英作文にさせています。例えば、「松井が昨日ホームランを打った！」という新鮮なニュースを英作文にさせることで、塾生は英語力アップを図り、同時に海外のニュースに興味を持つことができます。また、理数系の科目では、授業の導入として新聞記事を取り入れています。例えば、人口についての記事から日本の現在の人口密度を計算する、各地の地震のニュースから地震の初期微動の速さを求める式を立てるなど、具体的な内容を教えています。これらの実践によってかなりの成果を得られましたので、これからも授業に新聞を積極的に活用していきたいと思います。

Q：開倫塾のNIE研修の課題は何ですか。

A：まだ不十分ではありますが、専任や準専任講師への研修は少しずつ行われ、NIE活動の重要性が徐々に理解され、校舎やクラスでの取り組みもスタートしつつあります。

しかし、研修に不参加の非常勤講師の意識は高いものとはいえず、NIE活動へのスタートがなかなかきれないようです。今後の開倫塾におけるNIE研修の課題は、これまで研修に参加できなかった先生方に研修の機会を確保するためのしくみづくりをより積極的に推し進めることです。そして、非常勤講師の先生方が参加しやすい時間や場所を設定し、より魅力のある研修内容にすることであると思います。

このように、すべての先生方に対する「NIE研修のしくみづくり」が当面の課題といえます。

Q：開倫塾の塾生に対しての「新聞を読んで考えよう」活動の特色は何ですか。

A：40校舎すべてというわけにはいきませんが、毎年数校舎に新聞記者や新聞配達店の皆様をお招きして、「新聞ができるまで」「新聞が配達されるまで」というテーマで講演をして頂いております。2003年度は10校舎、2004年度は7校舎、2005年度は7校舎で、塾生を対象に講演会を実施しました。

塾生たちには、講演中は記者の方を取材するつもりで熱心にメモを取り続け、終了後は質問をして疑問を解決すると同時に、話を聞いて考えたことを文章に表現するよう指導しました。塾生たちの文章をまとめて入力した後、記者や販売店の皆様にお送りしています。

「新聞ができるまで」や「新聞が配達されるまで」の講演を聞いた塾生たちの多くは、毎朝・毎夕配達される新聞が様々な人々の血のにじむような努力で出来上がることを知って新聞に対する認識が変わり、少しでも多くの時間を費やして新聞を読んで考えようとの思いを持ったという旨の感

想を寄せています。さらに、何人かは、将来の職業として新聞記者を目指したいとの考えを述べていました。

また、反対に、新聞記者や新聞配達店の皆様から、講演によって知ったことについてどのように考えるかといった取材を受け、緊張しながらも自分の考えを述べる生まれてはじめての体験をした塾生も多く、よい勉強になったと本人や保護者から高い評価を受けることもあります。

Q：塾生を対象とした、新聞記者や販売店の皆様をお招きしての講演会の課題は何ですか。

A：すべての校舎で年に1回くらいは記者や販売店の方をお招きして話をお聞きしたいのですが、40にも上る校舎がありますので、それができないのが最大の問題点です。

開倫塾の校舎がある地域に勤務する全国紙や地方紙の記者の皆様とのコミュニケーションをより一層促進し、ご無理のない範囲で数年に1度くらいは講師をお願いできるようなしくみづくりが課題と言えます。

これまでは、記者の皆様のご都合に合わせて、中学2・3年生に講演を聞く機会を提供する場合が多かったのですが、どの学年の、どのような時期に、どのような内容の話を聞いてもらうことが、「本人の自覚」を促すという「教育成果」との関係で適切であるのかということについての研究も、次の課題であります。

受講者である塾生たちの満足度は極めて高く、また、講演者である記者や販売店の皆様も快く感じてくださっているようで、その講演の様子を記事にしてくださる記者の方もおられます。記者や新聞販売店の皆様など講演してくださる方と話を聞かせて頂く塾生たちが、できるだけ無理なく、自然な形でコミュニケーションがとれ、「新聞を読んで考える」きっかけづくりが可能になる場づくりが、今後の課題と言えます。

— 塾生から寄せられた感想 —

- ・新聞には、いろいろな記事が載っていることが分かり、今までは読んでいませんでしたが、これからはできるだけ読むようにしたいと思います。
- ・私は今まで新聞記者の話を聞いたことがなかったので、とても貴重な体験ができたと思います。新聞には、暗いことばかり載っているのではなく、明るいニュースや新製品のことなど、いろいろなことが載っていて面白いと思いました。新聞を読むことはとても大切だということも分かりました。1つの新聞を作るためにはたくさんの人が協力していることを知ることができ、また他にもたくさんお話を聞くことができ、よい体験ができました。

Q：開倫塾としてのNIE活動の展開については、各校舎の自主的な判断に委ねているのですか。

A：はい。先生方のNIE活動に対する認識を深めるための研修会や新聞記者・販売店の皆様をお招きしての塾生を対象とした講演会は、まだまだ不十分ではありますが、開倫塾全体で取り組んでおります。

しかし、各校舎でどのような形でNIE活動を展開するかは、それぞれの自主性に委ねております。各校舎で「塾生の自覚」を促すために創意工夫を凝らすことが、先生方にとってもやりがいに繋がると考えるからです。新聞記事のスクラップの方法を指導し、一人ひとりの塾生にスクラップブックを作成させている先生も多いようです。また、塾生に読んでもらいたい記事をコピーして手渡し、授業中に解説をしたり、廊下等に掲示することも多いようです。

学校でよく行われているような形で塾生たちに新聞を作らせている先生は、学習塾の性格上十分な指導時間がとれないために、いないようです。

Q：塾生にNIE活動に取り組ませる上での課題は何ですか。

A：よく考えて準備すれば、小学1年生から高校3年生まで多くの学年が学ぶ学習塾であっても十分に取り組み可能であると思いますが、責任者である私の勉強不足とリーダーシップの欠如のためにカリキュラムの中に入れるに到っておらず、したがって先生方への研修も十分なカリキュラムの下に行われているとは言えません。今後は、2010年を目標に、開倫塾のすべての学年のすべての教科の指導の中に、創意工夫を凝らして、何らかの形でNIEを取り入れることを課題としたいと思っています。

Q：開倫塾では、NIE活動をするときの費用はどうするのですか。

A：学校でのNIE活動はその日の新聞を使って行う場合が多く、その新聞を納入してもらうために巨額の費用を要する場合が多いと聞いています。

開倫塾でNIE活動をする場合は、その日の新聞ではなく各家庭で購読している新聞の前日分を使用するため、新聞を購入する費用は一切生じません。各家庭の不要になった前日の新聞を、NIE活動のためにお子様にプレゼントしてくださるよう保護者の皆様をお願いしています。開倫塾では、NIE活動のために活用する新聞は当日のものでも十分と考えているからです。海外では、当日の日本の新聞を入手することは困難な場合が多いですから、数日遅れの新聞でも有難く思います。このように考えれば、前日の新聞でも数日前の新聞でもNIE活動は可能になります。

Q：塾長である林さん自身のNIE活動促進への取り組みについて、教えてください。

A：以下に挙げるような取り組みをしております。

- ①開倫塾の代表者として、塾生、保護者、地域社会の皆様、ビジネスパートナー、教職員の皆様に対して「新聞を読んで考える」ことの大切さを訴えております。毎月1回6500部発行の広報誌「開倫塾ニュース」の巻頭言の中で、年に1回は「新聞を読んで考える」ことの大切さをいろいろな形で説き、奨励しております。また、私自身で担当している毎週土曜日午前9時15分から10分間放送中のラジオ番組CRT栃木放送「開倫塾の時間」の中でも、年に3～4回程「新聞を読んで考える」ことを訴えています(聴取者数10万人、今春で18年目)。
- ②各学校や教育委員会の要請に基づいて、「総合学習」や「道徳」の時間に社団法人経済同友会から派遣される講師として講演する折には、「新聞を読んで考える」ことの重要性を必ず話しています(月1～2回)。
- ③各学校や教育委員会から委託されて行う学校教職員やPTAの皆さんを対象とした教育講演会でも、「新聞を読んで考える」ことを訴えています(年間5～6回)。
- ④栃木県社会教育委員として、栃木県の学校教育や家庭教育、社会教育の中でもNIE活動を促進するための施策をとるように、栃木県社会教育委員会等で提言しています。
- ⑤栃木県教育委員会からの依頼で、開倫塾に毎年、社会体験研修生として2週間～3か月間派遣されてくる公立学校教員に対しても、NIE活動の重要性を説き、学校にもどってからNIE活動ができるスキルが身につくよう研修しています(2005年度は3か月間が2名)。
- ⑥開倫塾の職員採用試験の最終段階で行われる塾長面接試験において、当日の英字新聞の一面記

事を数分間音読させています。会社説明会においては、開倫塾では NIE 活動を推進し、「新聞を読んで考える」ことのできる塾生の育成に取り組んでいるため、当塾に就職を希望する人は毎日 1 時間以上日本語で書かれた新聞をなめるように熟読後、よくわかった内容だけでもよいのでそれらを毎日 1 時間英字新聞で読み返す習慣をつけてから、採用試験に臨むように要請しています。また、塾長面接では必ず英字新聞の音読が課せられることも明示しています。

⑦社団法人 経済同友会の「マスコミとジャーナリストのあり方を考える会」のメンバーとして、新聞のあり方についての研究を進めています。

Q：最後に一言どうぞ。

A：「補習」と「受験」を主な指導内容とする「学習塾」であっても、「教育成果」を規定する要因である「本人の自覚」と「先生の力量」は学校と同様に重要であり、そのためにも「新聞を読んで考える」という NIE 活動は欠くことができないというのが、開倫塾の基本的な考えであります。また、学習塾の社会的使命(mission、ミッション)は、学校教育の不足する部分を補うことにより塾生の成功の実現に貢献することであると考えます。ですから、学校での NIE 活動が不十分な地域でこそ開倫塾の行う NIE 活動の社会的意味があると考え、今後もしよう限りの活動を試みたいと考えております。

すべての民間教育機関でも、昨日の新聞を活用することによりお金をかけずに NIE 活動を、と願っております。